

「川の思い出」調査の概要と「同 2010」事業の報告

藤 村 俊

1 はじめに

当館が木曽川・飛騨川の合流点に位置する地理的環境から、地域と「川」の関わりを探ることは重要なテーマのひとつとされている。2010 年度には「川と人」に注目する展覧会が催されることになったが、考古・歴史資料を中心とした。一方で今後、近現代における人々と川との営みやつきあい方について考える参考とするため、現時点で人々の経験や記憶などを採集・記録しておく必要を感じた。そこで実施されたのが、ここで報告する「川の思い出」に関する事業である。前半では、アンケートや聞き取りによる調査結果の概要について。後半では、その調査成果をミュージアムの事業として展開した事例について報告する。

2 調査の方法と経過

(1) 「川の思い出」アンケート

現在、みのかも文化の森では6つのボランティアグループがあり、計160名が活動している。ボランティアは、美濃加茂市を中心として近隣を含めた地域の住民が中心となっていることから、おおむね今回の調査の目的に沿った回答が得られることが期待された。そのため、調査活動の主体となった、展示ガイド、美濃加茂伝承料理の会、美濃加茂市民ミュージアムの3者によるアンケート調査の依頼として、みのかも文化の森ボランティア全員に郵送する方法を基本とした（2010年6月に実施）。

結果は当初の期待どおり、多くの体験談や思い出などが寄せられることとなったが、それぞれの文面などをみると、事業自体への共感に加え、川に対する「思い」や記憶の呼び起こしのきっかけとなったことなども感じられた。それは、アンケートの整理にあたったメンバーも同様に感じたようであり、その後の関連した活動の推進力となったように思われる。

また、文化の森ボランティア自身に「川の思い出」が希薄であった場合には、その家族や関係者に質問が広められていったようである。そのため回答としては、実際の体験をした話者とアンケート記載者が異なるケースもみられたが、結果的に広く豊かな回答が寄せられることになった。

さて、2011年3月時点で、74件のアンケート用紙が回収された（現在も館内の常設展示室で回収を継続している）。しかしながら、それぞれの用紙内には、いくつもの「思い出」が記載されているため、件数を大きく上回っている。

アンケートでは、以下の項目について記載を求めた。（i）話者の年齢、（ii）性別、（iii）出身地（思い出となった場所）、（iv）関わった河川名、（v）思い出の内容、（vi）思い出の年代、（vii）話者あるいは記載者の氏名や連絡先、の7項目とした。

また、アンケートに併せて「川の思い出キーワード」を添付した。それは、日常生活で「川との関わり」が離れてしまったり、旧来の関わり方とは著しく変質しつつあると感じられる昨今、数十年前が中心になると思われる過去の経験や記憶を呼び起こすことは、バリアやハードルが多いと考えられたために行った措置である。また、調査そのものとしては、現代の「川との関わり」も垣間見えないかと期待したが、「過去の記憶」に大きく偏ったものとなってしまった（それは、現代の川との関係を示しているかもしれない）。

これらは、調査主体の意図が話者に影響を与えかねないために慎重となるべきだが、今回の回答をみる限り、思い出を呼び起こす「きっかけ」や「道標」ともいえるべき手助けとして、また調査者の目的に合う回答に向けて、一定の機能を果たしたのではないと思われる。

キーワードとしては、A群「だれと？」－自分・家族・友人・地域の人々、B群「どんなこと？」－

食（調理法など）・生き物（呼び名など）・木曽川①（川湊、渡し場、渡船など）・木曽川②（イカダ、船、ライン下りなど）・渡る①（橋など）・渡る②（対岸に行く用事：買い物、あそび、楽しみなど）・年中行事・民俗や祭礼（神社、水神、葬送など）・仕事（川原石採りなど）・昔話や言い伝え・水害や事故、C群「その他」一遊び、楽しみ、お手伝い・川、川原、川の近くを挙げた。

（２）住民への聞き取り

展示ガイドが、川と人々のつながりが深い場所に赴いて現地の状況調査を実施した（2010年度は4ヶ所）。その調査先では、付近の住民に対して、川との関わり方、暮らしや思い出などについて聞き取りも併せて行っている。また、そのようなグループとしての活動に併行し、美濃加茂伝承料理の会も含めた各メンバーによって、個別に個人との聞き取りが進められたケースもあった（大正～昭和初期に地域でアユを獲っていた人など）。

以上に基づく成果は、今回、その一部を報告する。また、毎年秋に行われてきた展示ガイドによる企画展「ちいさな展覧会」シリーズの2010年度版としても採用され、その内容が紹介されることとなった。

さらに同年、美濃加茂市民ミュージアム主催による企画展「川のほとりでー木曽川流域の考古と歴史からー」における関連事業として、参加体験型講座「川を味わう料理」が美濃加茂伝承料理の会によって開催された。そこでは、この地域の食卓を彩った川の恵みを活かした料理として、聞き取りなどを基にしたメニューが再現され、講座参加者と共に実際に調理して食するという機会となった。

3 調査の成果

回収されたアンケートは、展示ガイド及び美濃加茂伝承料理の会（3班）によって、整理分類作業が進められた。その過程で、それぞれの回答内容は、おおむね「川の思い出キーワード」の分類項目に関連付けられることが判明したため、これに沿って報告する。

今回報告されるものは、回答数が多かったもの、この地域の地理・歴史的環境などを象徴していると思われるテーマをメンバーで協議し、その結果を中心とした。そのため概要的な報告であり、アンケート回答を網羅し、かつ考察など進めたものではないことをお断りしておく。また各テーマ内の掲載順序は、便宜的に美濃加茂市内あるいは木曽川とその支流、近隣市町村、その他とした。ただし回答の記載は様々であり、年代や場所、関わった河川名などが明確でないものも多く一様ではないが、前後の関係などからできる限り、その特定を進めた。併せて今回の報告としての性格上、話者あるいは記載者の明らかな事実誤認や方言などは部分的に修正している。そして記述にあたり、原則として語尾の統一ははからず、人名は未記載、常用漢字、現代仮名づかいによった。ただし、固有名詞、歴史的用語、学術用語などはその限りでない。各テーマの文末には、整理・報告の担当者名を記載した。

（１）渡し場

今渡ダムが出来る前、小山観音のお祭りに川合の渡しを渡って行きました。綺麗な木曽川の流れて、渡し舟から川底の石もよく見えた記憶があります。その頃は小山観音も川原伝いに石段を登ってお参りしたものです。

【川合の渡し／昭和12年頃】

昭和14年3月、今渡ダムの完成により、風景が一変しました（「湖」のようになった）。

船頭さんは、県道金山線の関係で県が雇って、小山の岬（島崎）の小屋に常駐して、今渡川合、古井、小山の三つの地点を往来していました。

小学生の頃、お正月には、お節に子供たちが連れだって親戚の家へ遊びに行きました。生家は旧伏見村で上古井の郡是製糸の近くでした。

歩いて今渡川合の渡し場まで行って、小山の渡し小屋の船頭さんに「オーイ」と大声で呼ぶと、船を出して迎えに来て、古井の湊まで渡して下ったことが、懐かしく思い出されます。

【川合の渡し／昭和15年頃】

昭和17年2月頃、今渡川合へ夜に用事があり、毎々使用した。帰りは太田橋を廻った。当時の賃金は覚えていないが、自分の給料は月に25円くらい。(汽車賃は古井から岐阜まで49銭でした)

【川合の渡し／昭和17年頃】

岡田式渡し舟で祐泉寺から土田に渡ったりしていました。土田のお祭りのときは大勢の人で賑わいました。

【太田の渡し／昭和26年頃】

[伏屋伸造]

(2) 魚 獲 り

太田橋の下流(右岸)には広い砂地があり、その右側に地下水が流れてくる池のような内川があった。内川の水はきれいで、ここで泳いだり、魚や貝を獲って食べた。

魚は焼いて味噌煮、貝は醤油で焼いて食べた。コイ・フナ・シロハエ・ドジョウ・ウナギ・モロコ・センパラなどがいた。ウナギは10本位の針にミミズを取り付け、一晚中沈めておいて朝になってそれを上げるとよく掛かっていた。シロハエ・モロコやセンパラは魚獲り用のビンの中へむつご(蚕のさなぎ)を入れて沈めておくとよく獲れた。

【木曾川(内川)：美濃加茂市御門町周辺
／昭和25～33年】

釣り人にとって何といっても最大の行事はアユの解禁日です。前夜はお祭り騒ぎで、川原にテントを張って、釣り仲間と飲んだり食べたり大賑わいです。夜明けとともに一斉に川に入り、自分の陣を取って釣り糸をたらしめます。多いときは50～60尾取れ、アユ缶に一杯になりました。アユはスイカの様な匂いがします。

【飛騨川：加茂郡川辺町／昭和40～50年】

兄達はミミズを針に刺して糸で吊るして岩に挿んだ仕掛けを夕方にしかけました。朝見に行くと3～4尾のウナギが掛かっているので家で焼いて食べました。

【川浦川支流：美濃加茂市蜂屋町】

テエナ(手綱)という綱は、20間(約30メートル)ほどの長さがある。夕方、川で綱を張り、2時間くらいたった夜の8時過ぎにカンテラを持って網上げに行く。アユは火を怖がる。アユは川を遡上しているので、下流から上流へ岸に沿って綱を上げるとアユが掛かっている。

現在もこの方法で魚獲りをしています。

【津保川：加茂郡富加町】

川の淵のよどんだ所には、メダカなど小さな魚がいた。手ですくって飲んだり(飲むと泳ぎが上手になると上級生から云われた)、日本手ぬぐいを使って二人で息を合わせてすくった。川原の石を起こすと、オンタケ・チチコ・カブ(カジカ)・アジメ・アカザス(・・・刺されると痛いので、いやな魚だった)などの小魚がいた。

少し大きな石や岩の下から腕を突っ込んで、シロハエ・ウグイ・アマゴなど、泳ぐ魚を手できめることができ、楽しかった。男の子はヤスを使って深いところで魚を刺して獲っていた。

【小駄良川(長良川支流)：郡上市
／昭和30年頃】

小学校の低学年の頃、学校から帰って芝箕(しばみ)とタモを家から持ち出して川へ行って魚獲りをしました。ドジョウ・センパラ・ウルンチョ・ハエ・メダカなどがたくさん獲れました。ガマの中へタモや芝箕を入れてすくい出すまでの間、何が入っているか楽しみでした。

【志津野川：関市／昭和23年】

水は透明で、ハエやカブチが泳いでいた。兄達は、ヤスで突いて獲っていた。ハエは塩焼き、またお茶に生姜を入れ、煮て食べた。

【益田川：下呂市／昭和20年頃】

[渡辺真澄]

小さな子供の頃から、魚を獲りに行く父について木曾川へ行きました。大きくなると一人でも川へ行って魚を獲ったのですが、川で遊んでばかりで、ちっとも勉強をしないので、父に「川へ行く

のは土曜の夜だけ」と言われたほどです。

わたしの住んでいる太田本町は、毎年4月の3日か4日に祭りがあるのですが、「祭りの日に殺生をしてはいけない」と言う両親に従って、4月5日過ぎから鮎漁をはじめました。その夜、寝ていると川風が吹いてきて、鮎の臭いがします。川を鮎が上ってきたのがわかるのです。早速、翌日投網を持って鮎漁に行ったものです。犬山にダムができてからは鮎が上って来なくなりました。

投網で鮎を獲るのですが、鮎も、網が見えたり人の影が水面に映ると逃げてしまうので、漁はもっぱら夜です。足音にも敏感なので魚のいそうな場所を見極めたら、投げる場所の少し前から忍び足で近づき、川べりから網を投げます。水に入ると音がするので、減多に水の中へ入りません。

1回の漁で100匹くらい獲れる時もあれば、3～4匹の時もありました。

4月の鮎は10cm足らずの小さなものですが、8月になると味が落ちるものの、大きめの鮎が獲れます。

昭和20年以前のことだったと思いますが・・・深田の清水のところから中濃大橋まで、2時間ほど漁をして、重さにして一貫目(3.5kg)も獲れたことがあります。

普段、獲れた魚は家に持ち帰り、翌日、母に料理してもらうのですが、冷蔵庫のある家庭が少なかった時代、大量の鮎の処分に困って、近所にある魚屋(魚徳)に持ち込んで、店で売ってもらいました。鮎の煮方もそこで教えてもらったことがあります。私が漁をしていたのは、昭和10年頃から50年頃までです。

【木曾川：美濃加茂市太田本町ほか／80代男性】
[美濃加茂伝承料理の会3班]

(3) 泳ぎ

小学生の頃は、日曜日の暑い日になると、川へ泳ぎに行き、半日を過ごしていた。耳に水が入ると、河原の小石を拾って耳に当て、入った水を出していました。

【木曾川・加茂川／昭和13～18年】

太田橋の下流で、夏は、毎日泳いだ。木綿の布を枕のように縫って、浮袋にして泳いだ。袋をぬらして、口で息を吹き込み、ふくらませて浮袋にした。

【木曾川／昭和23～25年】

夏になると、プールがなかったため、毎日本曾川で遊びました。近所の年上の子たちについていき、水中メガネをつかって泳ぎました。赤旗が立っているときは(泳げないため)、がっかりして帰りました。

【木曾川／昭和30年頃】

潜水用の竹とビニルパイプを使ってもぐりました。ビニルパイプを口にくわえ、その先に竹をつけて、水中メガネのゴムでとめていました。坂祝の方までも行きました。お金持ちの子は、大きなタイヤのチューブの「うきわ」を持ってきて遊んでいました。

【木曾川／昭和30年頃】

母の実家は川岸にあったので、そこで育ったいとこたちと川で遊ぶことが楽しみでした。6才未満の時は、シュミーズに下着を着けたままの水遊びでした。いとこの男の子たちは、白いモッコフンドシでした。いとこたちは、泳げない私を深みに連れて行っては、そのまま手を離し、おいてけぼりにするので、私は必死に手足を動かし、もがいていた思い出があります。

今から思うと、ぞっとすることですが、いざという時には、いとこたちは助けてくれるし、いつの間にか泳ぎも身についたし、よい思い出です。

【木曾川：羽島郡笠松町／昭和20～30年】

めだかを川ですくい、それを飲むと泳ぎが上手になるといわれていた。

【長良川・木曾川ほか】

小学校高学年や中学生になると、水泳や釣りの場所が川辺ダムになった。泳ぎに自信のない子は、長さ4～5mの桐の丸太や長い竹材につかまって

泳いだ。泳ぎに自信がついてくると、川幅 200 mほどの対岸まで泳ぎきるようになった。さらに、1 往復、2 往復、3 往復する回数を競うようになった。私も、中学生の頃には、連続 5 回往復した覚えがある。

【飛騨川支流：加茂郡川辺町／昭和 18～25 年】

小学生のころ、低学年は深渡川で泳ぎました。高学年や中学生は、飛騨川でした。泳ぐ時には、保護者が当番で見守ってくれていました。救助用の道具は、長い竹の先に車のチューブ（「うきわ」に利用）を縄でしばりつけたものでした。

【飛騨川・深渡川／昭和 30 年頃】

小学 1 年生の男子は、水泳訓練ということで、高等科のお兄さんたちに連れられて木曽川へ水泳に行きました。1 年生は皆、赤フンドシをして、手を引かれて、泳ぐ練習をしました。

【飯田川：加茂郡八百津町／昭和 15～20 年】

谷川を石や草でせき止めて、自然の浅いプールをつくった。下級生たちが、喜んで遊んでいました。釣った魚を放してやり、みんなで追いかけてました。

【益田川：下呂市／昭和 30 年頃まで】

小学生の夏休みといえば、毎日、川へ泳ぎに行きました。泳げない低学年の子どもは、高学年の人が手をつかんで、バタ足から教えてくれました。川へ泳ぎに行く時は、「きゅうりを食べるな」と言われました。カップに川へ引き込まれると・・・、きっと、お腹を冷やさないととの知恵だったのでしょ。

【益田川：下呂市／昭和 30 年頃】

上級生が、各学年で遊泳区域を決めていた。3 年生になったら、川の中程の岩まで、5 年生で対岸まで、6 年生になったら激流に飛び込み、カップの川流れ、と。初めてステップアップして泳ぐ時は、必ず上級生が付き添ってくれた。

【小坂川：下呂市／昭和 30 年頃】

今のようにプールはありませんでしたので、夏になると川で泳ぎました。小学生になると、上級生と一緒に川の水泳場で、「犬かき」、「かえる泳ぎ」、「クロール」、「岩の上からの飛び込み」、「流れの強い方へは行かないこと」、「危険な場所」など、教えてくれました。大人は、田んぼや畑、山が忙しく、子どもについてくることはありませんでした。

【小駄良川（長良川支流）：郡上市

／昭和 30 年頃】

〔美濃輪久美子〕

（4）祈 り

川合地区では、通夜がなかったのも、葬式（自宅）が日中に済まされる程度だった。夜をまたぐことがなかった。死者が出た当日（の夜：いわゆる通夜にあたる）には、僧侶も呼ばず、各自が弔問する程度だった。

翌日、葬儀が日中に行われた。朝から組の者が取り持ち、行列で持つ道具を作った。親類の者の接待でオトキとなった。葬儀の取り持ちとしては、簡素、短時間で済むことになった。終了後は皆、早々に帰って行った。

ただし、組長（自治会長）、野の衆三人（ハカホリニン）には、夕食が振舞われた。

香典も相互扶助の意味合いが強かったためか、香典返しはなかった。

仕事が忙しいために、そんなやり方だったのだろうか。また、水難事故も多いため、死への畏れやケガレから、夜をまたがない仕組みだったのだろうか。現在は葬儀場で行うため、一般的なやり方となった。

【木曽川：美濃加茂市川合町／昭和 30 年以前】

川原で互層になった石をみつけたら、決してまたがないこと、拾って頭越しに後ろへ投げるように教わった。

【木曽川：美濃加茂市川合町／昭和 20～30 年】

七夕に飾った笹竹、お盆にお供えした野菜など、昔は川へ流していました。

【飛騨川／昭和 30 年頃】

お盆になると、「おしよ様」を送るため、母と青柳橋まで行きました。橋の上で送り火をたきました。どこの家庭でもそうだったのか、橋の上は、そこかしこに送り火の跡がありました。

【飛騨川／昭和30年頃】

お盆には、お供え物をナスでつくった「牛」にのせ、川へ流した。お盆明けには、橋の欄干に、たくさんの線香やろうそくが並べられていた。七夕かざりも川へ流した。

【飛騨川／昭和40年頃】

私が子どもだった頃、明治生まれの祖母に連れられて、飛騨川の川原へ“漬物石”にするための石を探しに行ったことがありました。祖母は一つ一つの石をていねいに見比べており、慎重に選んでいた様子が思い出されます。石を選ぶ時は、汚れた石や互層になった石を避けていたようです。特に赤茶色のシミがついたように見える石については、「昔、武士が戦った時に流れた血がついたものだ」という話を聞かせてくれました。川原の石に、特別な意味を抱いていたように思われます。

そんな祖母が選んだ石は、大樽用としては、少し平たい、やや大きめで長円の整った形の白っぽい石でした。小樽用には、白っぽい色で“ころん”とした丸い石でした。その後、私も主婦となり、祖母の様子や話を思い出しながら、川原で漬物用の石を拾いました。

【飛騨川：加茂郡川辺町／昭和30年頃】

水神祭り（山川橋のたもと）のこと。

弥都波能売神（みずはのめのかみ）が、まつられていました。祭礼は、7/31～8/1でした。わらで作った大きな舟に提灯をつけます。（この提灯は、自治会の各組から1つずつ出したもので、4月の夜祭りの山車に使ったものをしまっておいて、また、水神祭りに使われたようです。）

夜になると、それに火を入れます。成人男子が川に入って、わら舟を川の中央まで泳いで引いていき、流しました。提灯の明かりがキラキラしてきれいだったこと、夜の暗い川に入る人は、冷た

く、恐ろしくないだろうか心配したことが思い出されます。

その後は、家族みんなで水神様にお参りしてから帰りました。

現在、中川辺地区の水神祭りは、行われなくなったそうです。

【飛騨川：加茂郡川辺町／昭和30～40年】

私の生家では、盆供養の送りとして、精霊棚にお供えした。野菜、果物、お菓子などを川へ流し、先祖供養をした。その後、川の汚染など、公害にもつながり、徐々に廃止となった。

【馬瀬川支流：益田郡金山町／昭和30～40年前半】

[田口美代]

（5）清水

清水では、洗濯したり野菜を洗った。またスイカや果物、麦茶などを冷やしていた。

【木曽川：美濃加茂市太田本町／昭和30年頃】

神明堂には水神様があり、そこは水洗い場でした。1つの流れに3つか4つの洗い場があり、上で野菜、下で洗濯などに自然と分けられて皆が守っていた。小学生が週1回、掃除をしていた。真夏が一番上の洗い場でスイカを冷やしていた。盗まれることはなく、何時間も冷やしておけた。

【木曽川：美濃加茂市古井町下古井／昭和30年頃】

（6）川の味

めだか（を獲るとすぐに）焼けた熱い岩の上に広げて、焼いてその場で食べたわ。

【60代・女性】

山からの水が溜まるところに池を作って、鯉を飼った。蚕のさなぎを池に投げて鯉にあげた。祝い事があると鯉をさばいて食べたわ。

【70代・女性】

木曽川へ遊びに行って、トマトやきゅうりを流してつかまえる遊びをするうちに（トマトやきゅう

りが) 冷えるので、帰りにそれを食べながら帰った。

【70代・女性】

川へ行く途中の畑できゅうりとかを採って、川で食べた。後で、畑のおじさんに「もらったよ」って言うだけ……。

【60代・女性】

今からおおよそ30年前、川浦川の牛牧地区（伊深）で夫が、ごり（がっちよばば）という魚をたくさん獲ってきてくれました。群れになって泳いでいる小さな魚です。どうして食べたらよいのかわからないので、牛牧に住む夫のお母さんに聞いて、しょうがを入れてしょうゆで煮ました。私の母や父、子供たちは大喜びで食べましたが、獲ってきた本人は嫌だといって、口にしようとしませんでした。いつも魚を獲ってきてても本人は食べないので、なんとなく食卓がヘンな空気になって困りました。

【70代・女性】

蜂屋街道の側溝に山から流れてくるきれいな冷たい水の中にしじみの大きいのがたくさんいました。籠ですくって味噌汁に入れて夕食に食べました。

【70代・女性】

木曾川の内川には、シジミ、ドジョウ、白ハエ、メダカもたくさんいた。シジミは、肝臓の薬と言われていて、いつも獲って祖母の家に行ってきた。

【70代・女性】

曲がりくねった石垣のたくさんある川だったので、メダカ、フナ、白ハエ、オイカワを獲って七輪で焼き、軒下につるして天日干ししてから、甘辛く煮て食べました。シジミもたくさん獲れたので、味噌汁に入れて食べました。タニシも家の近くの溝にいたので味噌和えや、ゆでて糸に通した後干して食べました。ドジョウやうなぎは、蒲焼や卵とじとして、食べさせてもらいました。楽しくて楽しくて、夢中になって美味しくて……天国のような時でした。

【50代・女性】

アユご飯。脂ののった飛騨川のアユを使います。アユを薄味の塩焼きにし、お米の上ののせて普通に炊き上げます。炊き上がったらアユをほぐし、その身とご飯を混ぜ、最後にすりおろしたショウガを混ぜ合わせます。

【60代・女性】

[美濃加茂伝承料理の会3班]

4 ちいさな展覧会「川の思い出2010」

前述の調査を進めた展示ガイドボランティアによって、調査の成果を活かした展覧会が10月31日より開催された。以下はその際に作成された開催挨拶である。それをもって、内容の紹介とする。（写真1、図版1～5参照）

“私たち展示ガイドボランティアの地域をテーマとした「ちいさな展覧会」も今年で5回目を迎えることができました。

昨年は展示ガイド自身の体験・作業による「古代米づくり」に挑戦し、5月の田植えから10月の収穫や脱穀まで、半年間にわたって成長を見守りました。その過程では、他のボランティアとも協働しながら、子どもたちとも関わりを持つことができました。

今回は、美濃加茂市民ミュージアムの企画展である「川のほとりで—木曾川流域の考古と歴史から—」展に併せて、「川の思い出」アンケートを実施し、多数の方のご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

古くから川は自然の恵みだけでなく、モノやヒトの交流を盛んにするなど、その地域の社会や文化に大きな影響を与えてきました。そのためか、やはり私たちの川の思い出も多岐に渡りましたので、アンケート結果を「魚獲り」「泳ぎ」「信仰・祈り」などに分類して展示しています。なかでも「食（川魚などの料理）」については、美濃加茂伝承料理の会の方々に分担していただき、8月には「川を味わう料理」と題して講座も開催されました。今回、その様子も展示で紹介しています。

また展示の事前調査として8月には、市内川合地区の「川のゆかりの深い場所」を巡検し、川の信仰をいまだに残す水神様や県道として地域の人々

の交通を支えた「川合の渡し」、炊事・洗濯などに利用されている「箱井の清水」などを巡りました。その折には、地元で長年住んでいる方々にも、川との関わりなどのお話を伺いました。

最後になりましたが、「ちいさな」展覧会の開催にあたり、ご指導、ご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

2010年10月

展示ガイドボランティア一同 “

〔渡辺真澄〕



写真1 「川の思い出2010」展覧会設営

5 特別講座「川を味わう料理」

美濃加茂伝承料理の会3班では、調査の成果を活かして、参加体験型講座が開催された。以下は、携わったメンバーの一員である木嶋紗智恵によるふりかえりである。

”この講座は、美濃加茂市民ミュージアムで2010年夏季に開催する企画展「川のほとりで－木曽川流域の考古と歴史から－展」の関連行事に位置づけられました。8月1日に開催することに決めたのですが、担当班メンバーは少し困りました。なにせこれまで美濃加茂伝承料理の会が行ってきた、この地域に伝わる料理を研究し、参加者と共に調理して食するという「四季を食べる講座」では野菜が中心で、川の幸を扱ったことが、ほとんどなかったのです。

そこで私たちはまず、木曽川で子どもの頃から過ごしてきた地域の方にお話を伺いました。

4月上旬には、鮎が帯のようになって木曽川を上ってくる。それは夜、寝ていても臭いでわ

かったこと。そんな時、投網を持って川へ向かったこと。多い時は100匹ほど獲れたこと。昼間より夜の方がよく獲れたことなどを聞きました。

それと共にアンケートでは、子ども時代にシミーズ丁で泳いだこと、小魚を炭火で焼いて食べたこと、タニシやドジョウ、エビを獲ったことなど、川と共に四季を過ごした懐かしい暮らしの思い出を数多くいただきました。

以上のような調査や検討をふまえて、当日のメニューは、鮎雑炊、鱒の塩焼き、小鮎の甘露煮、しじみ汁、うざく、と決定しました。

ようやくメニューは決まったものの、それからいろいろとありました、例えば甘露煮のための小鮎は、時期が限られているため、入手できるかととても心配されました。

鮎雑炊の作り方もいろいろあります。リハーサルでは、①鮎を塩焼きにして米の上に乗せて一緒にご飯を炊き、鮎の頭や太い骨を除いて混ぜ、味をみながら塩加減する方法、②先にご飯を炊いて同時に鮎も塩焼きしておき、身をほぐしてから水分を多くしたご飯とあわせる方法などを試みました。当日は②で調理しました。

美しい姿で塩焼きを焼くには、内臓の出し方にもこだわります。割り箸を口から刺して「えら」を通し、腹に刺してひとひねりすればきれいに口から内臓が抜けていきます。踊り串の刺し方も練習してコツを覚えました。

当日は夏の日差しが強かったので、鱒を炭火で焼く時は、皆の額から汗が吹き出しました。

小鮎の甘露煮は、鍋に調味料を入れて沸騰させ、そこへ1匹ずつ入れました。弱火で時間をかけて煮込んでいくと汁気が少なくなります。その後、鍋を持ち上げて焦げつかないように左右へ回しながら汁気が鮎にからまるようにすると、形を崩すことなく、こってりと艶よく仕上げることができました。

うざくは、うなぎの蒲焼きときゅうりの酢の物です。また、伝承料理の会メンバーによる季節の漬物もいつもどおり配膳に加えました。

このようにして「川を味わう料理」ができました。まゆの家の座敷に配膳して、参加者と共にお

いしくいただきました。

食事の時には、子どもの頃の木曽川での魚獲りなどの思い出も一同で語り合いました。太田橋の下流の水位が増すと、魚が浅瀬に寄ってきて内川が二つできたこと、四つ手網でアユやシロハエがたくさん獲れたこと、魚を家で佃煮にしてもらい、その時の味は今でも忘れられないこと、清水ではスイカがいつも冷やしてあったことなど。また、「ウエ」という竹で編んだ漁撈具を再現して会場に持って来て下さった方もありました。このような時間を通じて、参加者の子どもの頃には、夏になると川で魚を獲るなどして楽しく遊び、皆が同じように川と共に過ごしていたことが思い出されました。

また講座中には、桶に氷水を張って、伝承料理の会メンバーの畑で収穫されたトマトや太くて曲がったキュウリを浮かべました。そして金魚鉢では、田んぼのドジョウが泳いでいました。このような雰囲気づくりは、昔を思い出すきっかけとなり、暑い中の清涼感にもなりました。

試行錯誤の連続でしたが、味わう機会の減った「川の恵み」を改めて見つめ直すことができました。今後の生活に取り入れたり、伝えていけたら良いと思います。(図版6 参照)”

[木嶋紗智恵]

6 まとめにかえて

前半では、近現代の「川と人」のあり方を探る調査について、後半は調査成果を市民とどのように共有・展開したかについて報告した。

その底辺には、ミュージアムの地盤となる地域の資源を調査研究して再発見の契機とし、蓄積していくこと。次には、その資源の素晴らしさなどを伝えようとする。その過程でミュージアムは市民が相互に交流したり、新たな発信のできる場となるよう、「磁場」「触媒」として機能できるのではないかという発想がある。

一方で参加者としては、ミュージアムと協働した事業への参加経験を出発として、得られた思いなどに関わった者同士で共有していく。それがやがて展示や講座、報告という形に結実し、総合化が進む。

その後、参加者はこのような機会を通じて自身が獲得したものをミュージアムから地域へ持ち帰ることになるのかもしれない。

最後になりましたが、展示ガイドボランティア、美濃加茂伝承料理の会3班の皆様をはじめ、一連の事業に関わっていただいた方々に心よりお礼申し上げます。(文中の氏名は敬称略)

(ふじむら しゅん 美濃加茂市民ミュージアム学芸員)

川のほとりで ― 箱井の清水 ―

川合町には、箱井の清水が残されています。川へ流れ落ちる清水を利用して、段差のあるいくつかの箱状のものが並び、そこを流れる清水が生活用水に利用されていました。

上ではきれいな野菜などを、下は汚れた洗濯物などを洗っていたようです。

以前は、木曾川沿いに清水がわき出る場所がいくつもあり、付近の人々によって管理・利用されていました。現在では、ほとんどみられなくなりました。
[田口美代]



図版 2 箱井の清水

川のほとりで ― 川合の渡し ―

平成22年6月22日、今渡ダムのすぐ上流にある川合渡（美濃加茂側）を訪れました。すぐ近くにお住まいの方にお話を伺うことができました。

今では、川に降りる小さな階段だけが渡であった面影を偲ばせているのですが、昭和初期、今渡ダムができるまでは、水面はもっと広く、広い川原があったようです。対岸の可児川合渡と、木曾川・飛騨川合流地点に突き出ているような小山島崎を結ぶと、ちょうど三角形のようになります。

この線上を船が行き来していて、重要な交通手段であり、県道となっていました。

時刻表などはなく、「おーい」と呼ぶと舟が来てくれて往来するという、のどかな時代だったようです。この三角形を泳いで渡ると、一人前の少年になったとみなされたそうです。

渡し場跡のすぐ前には馬頭観音がまつられており、陸路で運ばれた荷物が、ここで舟に積み込まれ、川を下っていったそうです。重要な交通の要であったことが伺えます。

観音様はよく手入れされ、きれいな花が手向けられています。現在でもお世話をされているとのことでした。
人の心の温かさを感じました。

[田口美代]



図版 1 川合の渡し

川のほとりで ― 川合のムクノキ ―



梅雨の蒸し暑さと、強い日差しの中を歩いていたら私たちは、思わずこの巨木のもとへ吸い寄せられました。

木陰は、まさに大きな自然のクーラーそのものでした。

樹齢約 800 年・高さ約 20m・周囲約 7.8m、岐阜県指定天然記念物であり、東側にのびるエノキとの合体木になっています。

少し前まで、ゴザを敷き、食べ物を持ち寄って、近所のお年寄りのみなさんの話合いの場でもあったそうです。

古くは、道行く人々のやすらぎの場所として。

＜川合の渡し＞を見下ろしながら、今も悠々と周りを見つめています。



【川尻かおる】

図版 4 川合のムクノキ

川のほとりで ― 常夜灯を兼ねた水神 ―

川合八幡神社には、常夜灯がありました。嘉永 6 (1853) 年に建立されたものです。

四面にはそれぞれ、「天照皇太神宮」や「金毘羅大権現」などの文字が刻まれています。人々は川との暮らしについて、どれほど神々に祈っていたかが忍ばれました。

以前は、川合の渡し場にありましたが、昭和初期になって発電所ができると、その場所が水没したため、現在の神社境内に移築されました。河岸段丘が高くなった所にある神社からは、一直線に本管川の水面を見下ろすことができます。

【田口美代】



図版 3 常夜灯を兼ねた水神

思い出を話してくださった方の

年齢 : 30代 40代 50代 60代 70代 80代 90以上

性別 : 男・女

出身地 : 美濃加茂市 町 他市 [川辺町]

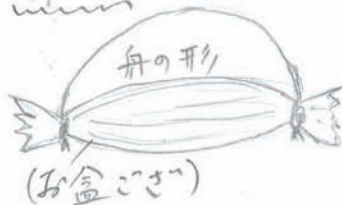
関わった川の名前 (わからなければ大まかな場所でもかまいません)

[飛騨川]

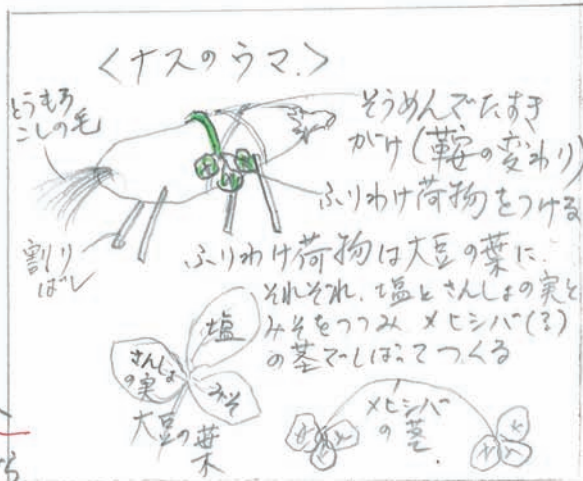
思い出

おしろ様 (お精霊様)

お盆 (7月13、14、15日) の間に供えたお供物と、
ナスで作ったうまをお盆に包み、両端をしぼって
舟の形に見立てる。



水を送り火をたいて、
川へ流す。霊魂が
水に乗って、川の向こうの
海の向こうの補陀落へ
流れて行くようにと祈りながら



上記の思い出の年代

[昭和・平成]

30年ごろ

40年代頃

図版5 「川の思い出」アンケート (回答)



鮎獲りの話を聞く（事前）



講座のはじまり



鮎の踊り串



当日の献立



食べたり・語り合ったり



川の思い出を語る



会場の演出(ドジョウ)



会場の演出(漁撈具)